はしがき

これは、ジュリアンという女性がイギリスのノリッジの地で教会に庵を結んで瞑想生活を送り、神から受けた啓示を記した書の翻訳です。エクスター大学出版局から出版されている Marion Glasscoe の編集になるものを底本としています。

ジュリアンが自らの手で書いたのか、口述し筆記させたものであったのかは分かりませんが、英国の歴史中、女性による最古のまとまった散文だとされています。一四世紀の末頃に書かれたものと思われますが、本書の元になったものは一五世紀の初頭かもっとのちに転写されたものであろうといわれています。

ジュリアンの残した啓示の書は、おおまかに二種類に分けられます。先に書かれた短いものと、のちに書き直された長いものです。短いものについては、すでに川中なほ子氏の翻訳が『中世思想原典集成一五』（上智大学中世思想研究所・平凡社 二〇〇二年）に収められています。本書の元となっている長いものの方は、ジュリアンがおそらく幅広い読者を想定し分かりやすく書き直したものであろうと思われます。とはいえ、始めは読み進むことが困難かも知れません。そのような際には、まず一番長い五一章に目を通すことをお勧めします。

中世の神秘家のひとりと数えられるジュリアンの残した啓示の書の特徴としては、キリスト受難の場面などを生き生きと描写していること、母としてのキリスト像が示されていること、罪の問題の扱い方などがあげられますが、ひとまず難しい問題は後回しにすることとしても、本書がジュリアンの言葉に率直に耳を傾けるきっかけとなれば望外の幸せです。

本書は八六章から成り、その中で一六の啓示が語られていきます。第一章が現代の目次に相当するでしょうか。啓示

は第四章から始まります。以降、新たな啓示が始まる章を列挙します。

第二の啓示―一〇章　第三―一一章　第四―一二章　第五―一三章　第六―一四章
第七の啓示―一五章　第八―一六章　第九―二二章　第一〇―二四章　第一一―二五章
第一二の啓示―二六章　第一三―二七章　第一四―四一章　第一五―六四章　第一六―六六章。

この時代のものは、現代のように段落ごとに改行されているわけではありません。ですが、そのままでは読者を当惑させてしまうと思われましたので、Spearing 訳のペンギンクラシックス版の段落構成にほぼ従って改行しています。

ジュリアンと私が出会ったのは、月に一度ほど開催される児馬修先生主宰の勉強会でのことでした。次は何を読もうかという相談の際に、宇賀治正朋先生からジュリアンを読んでみてはどうかというお話があったように記憶しています。テキストを用意し、いざ一回目に勉強会で読むまでには、どうしてなのかはいまだによく分からないのですが、すっかり魅了されてしまっていました。宇賀治先生が何かの折に、だれか翻訳してみてはどうか、とおっしゃったのを耳にし、途中で挫折しては恥ずかしいと、密かに翻訳作業に取りかかったのでした。浅学ゆえ、大きな誤謬がないことを、すべてがうまくいっていることを祈ります。

最後になりましたが、勉強会の世話役を一手に引き受けてくださっている保坂道雄先生はじめ、いつも貴重な時間をともに過ごしてくださる勉強会のメンバーのみなさまに、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。また、田上貞一郎先生には、初期の原稿の一部に目を通していただき、貴重な助言をちょうだいしました。

本書は、山出しの青二才を眼鏡の奥からやさしく見守ってくださった故 P. D. ベナー先生の思い出に捧げます。

二〇一一年十一月

内桶　真二